



沈むための感受性

深く感じる人が、深いとは限らない。

感受性がある人は、深い人だと見なされやすい。

空気の揺れを拾い、
他人の変化を察知し、
わずかな違和感にも反応する。

その反応の細かさが、
そのまま深さとして扱われる。

だが、
感受性は深さではない。

それは、まだ入口にある状態である。

強く反応することは、深さではない。

涙が早いことも、
怒りが鋭いことも、
言葉が多いことも。

それらはすべて、
外側への運動である。

拾えることと、
留められることは違う。

感受性は、素材である。

素材が多いほど、
豊かに見える。

だが、
素材は密度を保証しない。

感じたものをすぐに言葉にし、
すぐに共有し、
すぐに意味に変えるとき、
それは発散として消費される。

沈むためには、
感じたあとに動かない時間がある。

意味を与えず、
解釈もせず、
ただ重さだけを残す時間がある。

密度は、
反応ではなく滞留によって生まれる。

感じた瞬間に外へ向かう人と、
感じたあと、内側に留める人がいる。

前者は、豊かに見える。
後者は、変化が見えない。

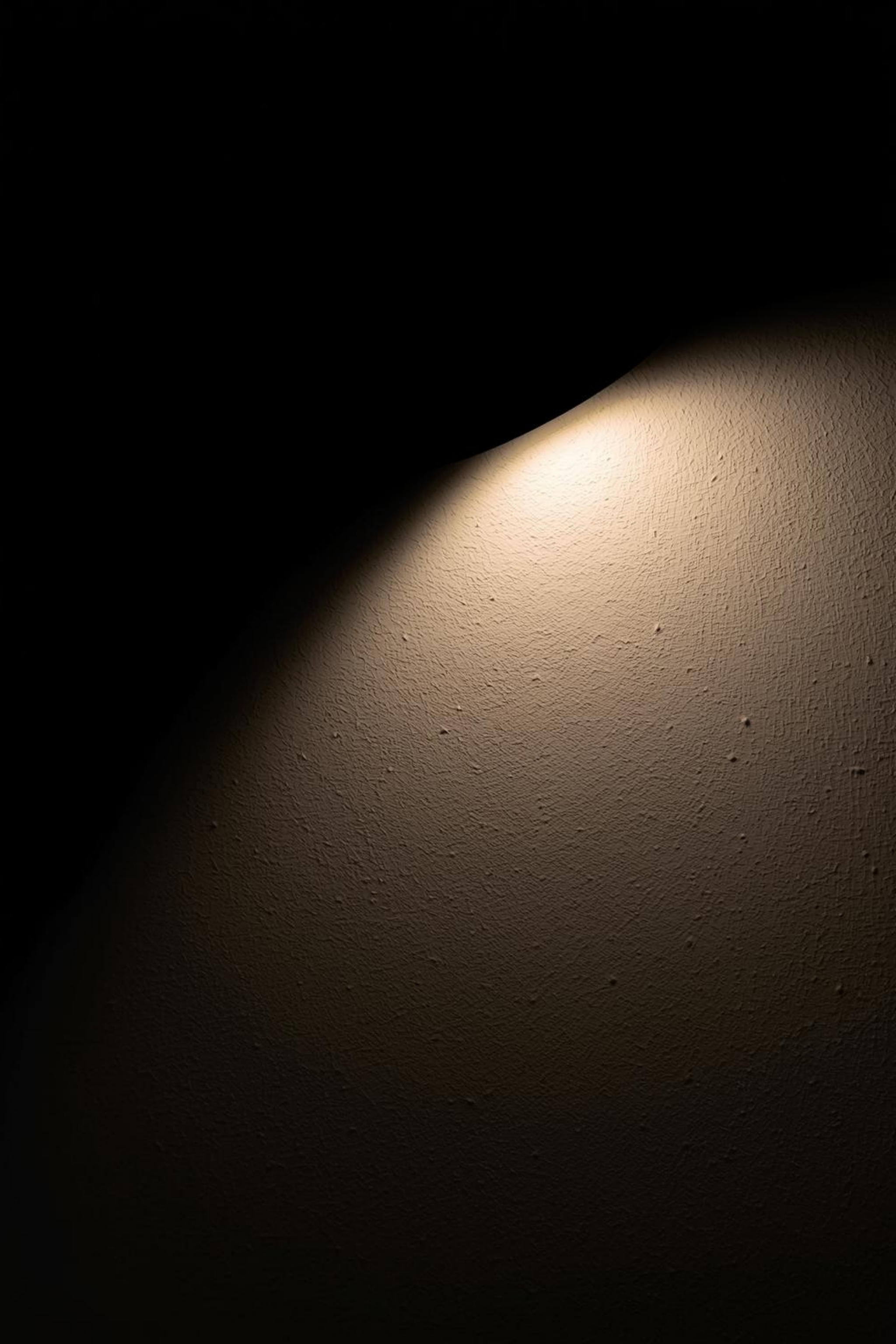
だが、
深度を決めるのは後者である。

感受性は、深さの証明ではない。

それは、
沈むために通過するだけの通路である。



沈むかどうかは、
感じたあとで決まる。



Edition — 存在の芯
別景：沈むための感受性

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026